

## 渡辺よしたかと平井三恭の訣別

### — 歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（下）その3 —

野口 周一<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学

#### 【キーワード】

台湾 渡辺よしたか 平井三恭 『あぢさゐ』 『薫風』

#### はじめに

前稿の末尾に、筆者は「平井三恭の消息」として、次のように記した。

渡辺よしたかの妻・次子は「十二月二十七日あと四日で新年を迎えます。昭和三十年は良きにつけ悪しきにつけ忘れ得ぬ年となりました」と記し（『あぢさゐ』第31巻1月号）、よしたかは「時雨山房雑記」に、「或る事件があった、私は一切の抗議をしない。善悪正邪は何ものよりも最明瞭にその人自身の中に語られてゐる。唯時がそれを明らかにすることを知っているのみである」と語るのみであった（『あぢさゐ』第31巻2月号）。

『あぢさゐ』における平井三恭（1911〈明治44〉～1984〈昭和59〉）の存在の大きさを認識するにつけ、その解明は最重要課題である。従って、本稿は標題にあるごとく、よしたかと三恭の交流に焦点をおき、この問題について論じていきたい。

このたび、利用した三恭関係の図書は、次のものである。ただ、遺憾ながら創刊当初の歌誌『薫風』を探し出すことはできなかった。

合同歌集『桂馬抄』〈薫風叢書第2集〉（薫風発行所、1958年）

歌集『焰ひの中の美学』〈薫風叢書第7集〉（短歌薫風社、1963年）

歌論集『短歌へのアプローチ』〈薫風叢書第16集〉（短歌 薫風社、1968年）

歌集『水のころ』〈薫風叢書第18集〉（初音書房、1970年）

歌集『生きていてこそ』〈薫風叢書第28集〉（短歌 薫風社、1974年）

歌論集『短歌へのアプローチ』第2巻〈薫風叢書第26集〉（新星書房、1973年）

歌集『削青俎』〈薫風草書40集〉（国文社、1981年）

「平井三恭追悼号」『薫風』1984年12月発行  
歌論集『短歌へのアプローチ』第3巻<sup>(1)</sup>〈薫風叢書第50集〉、短歌 薫風社、1985年）

また、上掲「平井三恭追悼号」所収の「著作目録」に記されている歌集『虹薫』（1959年）、『薫風創刊の経緯』（1967年）、『薫風創刊の経緯』（続）（1969年）は手に取ることができなかった。

さて、今までに筆者が発表した渡辺よしたか関係の論文は、次の7編である。

①「歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（上）」（『湘北紀要』第30号、2009年）

#### <連絡先>

野口 周一 noguchi@shohoku.ac.jp

- ②「歌人`渡辺よしたか、の生涯と作品(中) —その1—」(『湘北紀要』第31号、2010年)
- ③「渡辺よしたかの戦争詠をめぐって—歌人`渡辺よしたか、の生涯と作品(中)その2—」(『湘北紀要』第32号、2011年)
- ④「君がため秋白日の香<sup>た</sup>煙かむ—花蓮港街に生きた渡辺よしたか・みどり夫妻—」(『人物研究』第28号、近代人物研究会、2011年)
- ⑤「渡辺よしたかの戦後詠(1946～1951)をめぐって—歌人`渡辺よしたか、の生涯と作品(下)その1—」(『湘北紀要』第33号、2012年)
- ⑥「歌人・浜口英子と台湾」(『湘北紀要』第33号、2012年)
- ⑦「渡辺よしたかの戦後詠(1952～1955)をめぐって—歌人`渡辺よしたか、の生涯と作品(下)その2—」(『湘北紀要』第34号、2013年)

なお、上掲⑥は渡辺よしたかを正面から取り上げたものではない。104歳で長逝した英子(あらたま社主宰者の一人・浜口正雄夫人)の三回忌を期して成稿、はからずも『あらたま』と『あぢさゐ』を繋ぐ植村蘭花を取り上げることになり、よしたかの蘭花評も収録することができた。

以下、論旨の関係上、上掲論文を引用する際は、①を本編(上)、②を本編(中)－1、③を本編(中)－2、④を付編、⑤を本編(下)－1、⑥を浜口英子論、⑦を本編(下)－2、と順次略称する。

## 1. 平井三恭の`反乱、

まず三恭の歌歴について、自ら語ってもらうことにする(『焰の中の美学』あとがき、『焰の中の美学』所収、1963年)。すなわち、

私の短歌は大正十一年十一月十六日、母きくの手ほどきをうけて作歌した時にはじまる。其の後折にふれ幼稚な歌を作っていたが、

中学に入って啄木歌集に接して大に刺戟されその模倣を続けた。昭和五年末台湾に渡り渡辺義隆師のあぢさゐ会に入り、短歌のきびしさ、歓びは此処の勉強で得たもので有り、其の後の波乱も全く短歌に拠る心によって支えられた。満州北支を遍歴して昭和二十一年三月帰国、昭和二十二年渡辺義隆師と再会。再刊したあぢさゐ復活の為全力をつくすべく全二十六年十一月阪神支部創立、全二十七年一月選者となり、全二十八年末には支部会員百八十名を擁する阪神支社となっていた。(293-294頁)

昭和二十九年秋頃より社の経営民主化について意見を出し一度は入れられたが、再度逆転、折渉一年余に及んだが解決の目途が立たぬ為、独り退会を決意した処、一支部を除く全員がこの際脱会して一社を興せと決議した為、あぢさゐ会の長老瓜生英彦氏と共に止むなく会員の総意に従って薫風社を創立した。(294頁)

とある。

上記の述懐は、三恭自身が自らの歌歴と、よしたかとの訣別の推移を語ったものである。事件より12年ほど経過しているので、比較的冷静に叙述していると思われるので、ここにあげた。本章では、事件当時、三恭が事態の経緯と経過、及び顛末をどのように記録していたか、時系列に沿って採録していきたい。

なお、標記の`反乱、という文言は、次子が『あぢさゐ』廃刊の辞に「復刊して三十三年歌友の反乱などもあり多難の道ではありましたが」と記したことによる(「あとがき」『あぢさゐ』第58巻2・3号合併号)。

### A. 「薫風創刊4首」(1956年1月)

渡辺よしたかと袂を別った平井三恭が創刊した歌誌は『薫風』という。その創刊当初の号は、このたび探し出すことができなかつたが、三恭の第4歌集『割青俎』の冒頭に、その訣別を詠む歌が幸いにも掲載されているので、ここに挙げる。

氷の沼を刺すがに葦の葉先見ゆ なにに抛ら  
なん歌なりという  
逐われたるわれはいずべに行きうべき霜明り  
なる夜の深さに  
カインの裔のごとく孤り風聴けば讒謗のこえ  
心さわがす  
瞋恚の目ひしひし感じつつこがらしの夜を創  
刊の歌誌編みてゆく

これは、『薫風』創刊号に掲載された歌と思われる。「カインの裔」は、『旧約聖書』にいう、アダムとイブがエデンの園を追われた後、彼らはカインとアベルという二人の子をもうけたことに関わる。やがて両者は長じて、神への捧げものに関わる諍いからカインは弟アベルを殺してしまうのである。そして、カインはエデンの東にあるノドの地に追放されたという。ここに三恭は愛するあぢさゐ会からの自らの「追放」を実感したのである。

「瞋恚」とは「いかり。いかり憎むこと。自分の心にたがうものをいかりうらむこと。腹立ち。憎悪」とある(中村元『仏教語大辞典』上巻〈東京書籍、1975年〉790頁)。三恭は、このようなあぢさゐ会からの怒り、うらみ、憎悪を感じていたのである。

### B. 「薫風に思う」(1956年1月)

次の一文は、『薫風』創刊号の「創刊の辞」に相当するものであろうか。これは『短歌へのアプローチ』所収「私はかく在る」117-118頁、に再録されている。

薫風の発刊は一挙に決定し、即座に実行に移された。然も年末用務山積の折とて、誠に走忽の限りであった。

関西の会員から随分と発刊に対する熾烈な要望が寄せられていたが、私には初めから全然そんな意志は無かつた。今迄の月間十四・五回の歌会指導、月に二千首に余る歌稿添削等、肉体的精神的の労働過重が限界線迄来ており、之以上の負担に自信が無かつたのである。

所が十一月二十日、二百名の会員に抛る議決によって、無理往生の形にせられてしまった。加えて年末迄に創刊号として新年号を出したいと言うのである。この為に遅くとも十二月十日迄には原稿が印刷に廻さねばならぬ。余猶期間は二十日しかない。この間に印刷屋探し、資金集め、編集事務、それに併行して薫風社の組織確立等総てが一時に押し寄せて来た。だが踏み切った以上、他の総てを放擲してもやらねばならぬ。それが会員諸君の熱意に対する答えであると共に、薫風が世に生まれた意義を達成せしむる必須の条件である。

責任者となった瓜生英彦氏は三十年来の先輩であり、心許し合った友でもある。唇齒輔車の形でゆける好条件であり、又直接実務に携って輔けてくれる編集陣は気鋭の若手揃いで、火の如く燃えており、全会員を掌握している十七名の老巧な支部長が積極的に支援してくれる。かくて連日不眠不休に近い事務処理が続き、幾度か参りかけたが、若き編集部員の熱情に鞭打たれ乍ら、とも角やと呱呱の声をあぐる迄に漕ぎつけた。

だが事急の為、何らの事前の準備もプランも無く、加えて不馴れの為に出来栄は誠にお粗末なもので有る。改善すべき点が諸所に目立っている。けれども私達会員が陣痛の苦しみを分け合つて生まれた丈に、この喜びは一入である。

さてこれからが大変で有る。生み放しはたやすいが、その俣でなら栄養失調の三号雑誌の恐れが

多分にある。之を如何に育てるかが今後に残された問題である。

結社の芯となる理論の如きは、発刊の辞で多少触れてもあり、四角張って再説する必要も無からう。唯私たちは、この「薫風」を各人が各々自己のものとして、愛情を持って育ててゆかねばならない。暖かい励ましも必要であろう。厳しい鞭がいるかもしれない。風霜に耐え乍ら薫風がやがて其の名の如く、薫る日を夢見乍ら、一步一步前進していきたい。

私は薫風に一つの課題をもっている。それは、短歌結社の民主化と言う事である。

こうした短歌の結社は、大抵の場合主宰者が作歌の最高権威であると共に、その社の経営の一切の権限を握っている。この為、極めて封建的な独裁制となり、歌作表現の場合や、結社内に於ける行動についても、会員の意志が制肘されたり、封殺されたり、或は無批判の服従が強要され、時には追放されたりする場合がある。特に主宰者が雑誌経営による収入によって生活を支えている場合など、この傾向が特に強いようだ。このような独善性の基盤にたつ為、短歌が主宰者の好む型に嵌められてしまい、新しい短歌への脱皮が見られなくて、失望したり作歌意欲を喪失したり、或は短歌そのものの存在価値すら疑わずに至る。かくて第二芸術論や、滅亡論の如きが生ずるに由因すら醸成することになり、之が歌壇の持つ通弊的一面の如くに感じられる。何処迄やれるか分らぬが、かねての持論である民主化を「薫風」で実現してみたい。

先ず主宰者（指導者）と言う意味は作歌的实力による権威であるとし、社の運営とは区別したい。「薫風社」の運営は責任をまかされた瓜生氏と私との合議制であるが、編集に関する事は編集委員会の決議により実施し、運営に関しては運営委員会を置いて、各会員の意見をどしどし反映する

ようにしたい。又短歌の指導はごく初心者の場合には別として、かなり進んだ人にはその表現結果に指導者の私見を押しつけるようなことはしたくない。寧ろ其の人が何の為に歌を詠んでいるのか、歌から何を求めているのか、対象の追究方法は之で良いのか、作歌態度はどうなのか、と言った作歌以前の問題を重視してアドバイスし、自から種々の疑問を提出し自からの作歌実践を通じて解明して行くと言う態度の確立を援助して行くことが任務であろう。

このようなあり方から各自は、自己の主体性を打ち樹て、意見の発表機会を与えられる事により、運営に参画すると言う一つの責任感と、指導者から受ける抑圧感から解放された自由感を得て、人間性の確立を前提とする個性ある各人の歌風が生まれてくると信じている。私は結社がかくあるべきであり、かくあらしめなばならぬと信じているが、この理想と現実の世界とは大きな懸隔が横たわっており、それ丈実現に非常な困難が予期される。それは或る意味に於て私と私の心の戦いであり、次に私と会員諸君の相剋の形となるかも知れない。然し之が至上の要請を確信できるならば、お互いが為し遂げんとする善意の意志力と、相手をいたわり援けてゆく寛容と愛情によって前進してゆけるであろう。夢は限りない。このような考え方から、又実践から歌壇の沈滞が破られて新風を生じ、結社の新しいあり方を示唆し得ないと、誰が保障し得ようか。

薫風の生まれた意義又ここに加重されるわけで、会員諸君の熱意ある支援と善意の批判を期待する所以でもある。(31・1)

ここで、三恭はよしたかと訣別する意志は全くなかったが、歌稿添削等の負担が限界に達していたと述べる。そのような状況下で、関西の会員から「独立」の熾烈な要求を突きつけられたということ

は、三恭の猛烈な仕事ぶりと、それについての理解が支社会員間に敷衍していたと推測される。

そして、薫風社が創設され、責任者に瓜生英彦<sup>(2)</sup>が推されたのであった。これは三恭の強い要望であったと考えられる。英彦は、かつて「あぢさゐ四天王」の一人であると評されていたこともあり（本編（下）-2）、あぢさゐ会において三恭が頼ることのできる唯一の歌人であったといえる。

次いで問題となるのは「経営の民主化」ということであるが、『薫風』創刊号の「発刊の辞」は探しえなかった。しかし、「主宰者が作歌の最高権威であるとともに、その社の経営の一切の権限を握っている」ことは、あぢさゐ社においては、自明のこととされていた。また「短歌が主宰者の好む型に嵌められてしまい」という指摘は、よしたかの歌評から筆者でも窺い知れるが、それはよしたかの強い指導力とも理解できる。

ただ、「経営の民主化」ということについて、筆者は『あぢさゐ』第30巻から改革の一端を読み取ることはできなかった。

### C. 「壺中天荘雜記（1）」（1956年4月）

これは『あぢさゐ』でいえば、「時雨山房雜記」に相当するものである。三恭も『あぢさゐ』において、この呼称を用いていたことがある。

三恭の随想に「壺中の天」があり、その冒頭は「題号の弁」である。彼は「在支時代私の居た公館に『壺中天荘』と看板をあげた事がある。今またこの題を付したのはこの言葉に深い魅力を感じるからである」、「壺中天地乾坤外 夢裏身名且暮間」とある和漢朗詠集よりとったが、原典は後漢書方術伝にある相だ、意味は仙人のすむ所、別天地と言ふ事であるが、私しは一步進めて名誉利欲の如き打算俗塵の及ばない至純至高の世界と私流に解し、その様な世界にふさわしい心処を得むが為に己を創る所とも敷衍してゐる」と、その由来を記して

いる（『あぢさゐ』第29巻2月号）。

標記の一文において、三恭は「或る収穫」と題して、よしたかを4節にわたり糾弾したのである。

#### 「或る収穫」

短歌あぢさゐ会に所属してここを墓場と決めていた私が何故別個の道を歩まねばならなくなったか。何故追放されねばならなかったか、いずれ真相を発表する日もあろう。だが今は感情的に経過に触れるべき時ではない。それよりも経過を顧りみて私なりのよき経験であったと言う収穫となした。

薫風発刊と言う思いがけない事態が生ずる迄、私は過去一年余人間としてどうあるべきかと言う自己確立を前提に発生した問題に心肝をきざんだ。私は悟りを持っているとか、人間的に出来ているとか、寛容であるとか——そうした美徳を並べるに価する人間とはうぬぼれていない。否むしろ他以上に感情的であり、相手の不正を怒り、欺瞞を追究し、相手を許す事の出来ない哀れな人間である。然しこの哀れさを自覚している事が、或る意味の私の長所かも知れない。常に一つの事態から多くの価値ある意義を吸収し得るからである。以下問題のプロセスに於ての私の収穫である。

#### (1) 偽善と善の差

如何ように高遠な理想や神の境地や倫理道德を説いても、其の人の行為がそれを裏切っており、そのみならずそれ自体が社会的に常識的に容認されぬものであるなら、それは明らかに偽善である。そのような事を口にしない市井の一市民と雖も、遵うべき規矩はある。まして自から人に説く場合、必ずそれが実践されてあらねばならぬ、実践されぬどころか、説く事と反対の行動をとるなら、如何にその人が主観的に正しいと確信していたとしても、単なる独善的見解にすぎない。この偽善こそ世を毒する最大のものである。

私は判断としての社会とか常識とかが、常に厳密に正しいとは断言し得ない。だが社会に住めば社会を維持する為の秩序や常識を無視しては生きてゆけない。此処に人間として規正さるべき範疇の生ずるのは当然である。従って我々は自己が正しいあり方を求めていると確信した時、必ず厳しい反省が伴わなければならない。反省の無いものは自己過信であり、批判を許さぬ他への押しつけともなる。

## (2) 神にはなれない

人間が如何ように生きるかは永遠の課題であろう。其の一つとして神の完璧を求めて努力する事もありうる。けれども人間は所詮人間である。我々は神にはなれないのである。或る意味に於て神は人間の理想である、人間の絶対到達し得ぬ完全なものと言えようし、であるが故に欠陥だらけの人間が、自からの力で救われぬ為に、神にあこがれ神に救いを求めることになる。つまり人間のもつ宿命的な欠陥を承認して、一步でも神に近づくべく努力すること自体が尊いのである。従って絶対になれぬものに自からなつたと思ったり、或は側近の者が神と同等などとあがめるから、本人をして錯覚せしめ、うぬぼれさせ、自己も他も欺瞞せざるを得ない自縛に陥ち入ってしまうと言えよう。

観念的な神への希求は一つの遊びであって何ら意義を生じない。一つ一つが神に近づく厳粛さに於て実践されて初めて価値となるのである。

## (3) 我々は批判の世界に住んでいる

善意でやった事は無批判に許され、或は批判を超越すると言うものではない。如何に善意であっても(人間愛や神の愛のごときのものであると自信しても)それが他に影響して悪となり醜となる場合、それは善とは言えない単なる独善にすぎない。

例えば、或る女性が自分の肉体を提供して、男が性的に満足し精神的に解放感により高められる

なら、女として最高の行為であると信念し、多数の男と関係していたと聞いた事がある。彼女の見解は飽く迄善意であり高貴な愛であったかも知れない。然し之を社会的見地より見れば悪であると躊躇なく言えよう。次のような例はどうであろう。Aは宗教家である。常に人間救済を唱えているAはBと言う未亡人に之を説いた。Bは救世主の如く彼に傾倒した。Aは崇高な神の気持ちであつたらうし、Bはそれをきく事によって自己が純粹に高められていったと信じたであろう。処が時を経るに従ってBは傾倒のあまり恋愛感情に移行していった。そして肉体関係が生じた。(或はその可能性が生じた) こうした場合、社会的批判がおこるのは当然であるが、AはBが勝手に恋したので自分に罪はないと、自己の潔白を主張しうるであろうか。この段階にはいれば善意とか神の愛は通用しない。それはも早社会が許さぬ、否神の許さぬ不倫行為である。Bに連なる一家親類はどうなり、そこには既に早や不幸の種が蒔かれたのである。我々は隣人を不幸にする権利は無い。それを敢て為すならばそれは大いなる罪悪でなくてなんでもろう。善意とか神の愛とかと言うものは、普遍的なもので、一特定人を対象としたものであってはならない。

## (4) 計算された言辭

「或る事件があつた、私は一切の抗議をしない。善悪正邪は何ものよりも最明瞭にその人自身の中に語られている。唯時がそれを明らかにすることを知っている。私は精神的におそらく生涯最大の屈辱を感じ悲しんだ。然しそれは遂に私に高貴なる教訓を与えてくれ、大いに学ばしめられたことを無限のよろこびとするものである。かくして私は心深くしずかに何ものかに感謝の思いをいただき、その苦難の度が深く強いほど私の主体を本質を神的本源に磨きあげられてゆくことを知った。……私はこの事件に寄って、超越の意義をかたく

確認した。何ものをも私自身の主体を毀損し得るものではないことをまさに確認した。私は……その人々と同じ段階にはいなかったのである」こう言う文が発表された。

言葉は相手にきかせるものであり、文は相手に読ませるものである。即ち第三者を予定して己の主張を容認させる為の手段であり宣伝とも言える。だからその言葉は実はそのまま抗議であり弁解である。然も自己を被害者のようにみせ乍ら相手を寛容すると言った言辞修飾の効果をねらった或る意味の反撃でもある。之をよみ之を聴けば誰でも同情するであろうし、寛容な人であると思うだろう。そして事実はボールに覆いかくされてしまう。

このようなこまかい計算のはいった言葉であり文字である所に、その人の心のいやし卑劣さが出ている。まして相手をゆるすとかお前より一段高いと言った言い方は、之は明らかに何等反省の伴わない自己過信による不遜さで、自己の非を棚にあげて相手を巧妙に陥し入れんとした伏線的言辞であり、感謝する等の言葉に至っては、裏返してみればイクオール憎悪と言う事になる。本当に抗議しない弁解しない気ならそれは相手にも又他の誰にも言う必要もない筈だ。黙々と無言に実行することによってその真実が表明されるのである。それを他に訴えろと言う事自体が既にその言葉を裏切っている。私はこの文にかかれた裏の時事を知っているから尚それが言えるのである。

こうしてみると世の中は、虚栄・嫉妬・欺瞞・偽善・憎悪と言ったものが、充満しており、然も詭弁的装飾によって、崇高に清浄にみせている。之が恐ろしい毒気を持って、人々を汚染しスポイルするのである。もっと謙虚にもっと赤裸々に、人間が真実に徹することが生きる基盤に求められねばならないと思う。(31・4)

この一文は、『短歌へのアプローチ』に収録されたものに拠った。(1)と(3)について、現在のところ筆者は具体的な像は描けない。(4)は本稿の「はじめに」における三恭の応えである。

ここでは次のことに限定して語りたい。それは(2)「神にはなれない」から、直ちに想起できることは『聖愛』発行の件である。三恭は「絶対になれぬものに自からなつたと思つたり、或は側近の者が神と同等などとあがめるから」と指弾するが、筆者はよしたかの足取りを追跡しつつ思うのは、前者については論証に欠けるが、全くそうとは思えないのである。

ただ、後者については『聖愛』創刊号を一読すれば理解できる(本編(下)-2, 83-85頁)。また、中島しぐれ氏も会員間に「あぢさゝる教」とか「よしたか教」という言われ方があった、と筆者に語ったことがある。

#### D. 「後記」(『桂馬抄』所収、1958年3月)

これは薫風社創立3周年を記念して、会員118名の各人自薦の10首を集大成した合同歌集である。三恭は、

昭和三十一年一月薫風創刊号を出して以来三年、実に苦しい日の連続であった。もともと出発が前社を追放同様にされ不当な汚名迄させられた反発と歌はかくあるべしと言ふ信念具現の為のやむなき独立ではあったが、それ丈に執拗な妨害攪乱が続いた。つづいて社の内部における結束を乱す何人かが去った。それは感情に負けたり、利害打算に働いたり他を陥入れたりして、私の足とも手とも頼む何人かがまきおこした渦に心肝をきざむ思ひであった。だが終始一貫私を支持してくれた瓜生英彦先生のかかわぬ友情とこの歌集に名をつらねた諸君の支援の結果が今日を迎えたのである。

と記す。上記の内容は、三点にまとめられる。

一つは、あぢさゐと訣別した際、それは「追放同様」であったこと、「不当な汚名迄きせられた」こと、加えて「執拗な妨害攪乱」をうけたことである。しかし、これは『あぢさゐ』から窺い知ることにはできない。二つ目は、『薫風』の信頼していた有力会員に裏切られたこと、三つ目は瓜生英彦が創刊以来三恭を支持し続けたことである。

### E. 「歌集碧き湖鑑賞」

よしたかの歌集『碧き湖』（あぢさゐ社、1964年）について、これは後年の記録であり、長文であるものの、これも煩を厭わず全文を掲げる。

短歌はどのように詠むべきであろうか。アララギの詠風と潮音の詠風は対蹠的である。またアララギや潮音やその他を含めた既成歌壇と前衛短歌はもっときわ立った対立をみせている。己れの方がよいというより相手を短歌と認めていないふうすら感じられる。このように短歌といっても幅広い多彩さの中に己れの短歌の存在を主張しているのである。

このたび第二歌集として刊行された旧師渡辺義隆先生の歌集碧き湖はこの中の何処に位置するものであろうか。先生の言によると、歌は島木赤彦に私淑して数年を独学し、その後それを土台として自からの短歌を創められたようである。従って歌風は当然ながら写生を土台に置いている。これは何も先生のみならず、現歌壇の大部がアララギの影響を受けている以上、写生詠を基調とするのに軌を一にしているのは不思議ではない。むしろ先生は現歌壇の誰よりも純粹に写生を追求された感が深い。自然観照が実に細かく行き届いており、そこに作者の詩が心にくいほど冴え冴えと展開している。

試みに現歌壇の人と対比してみよう。手近な短歌研究(37・1)に橋本徳寿氏とアララギの正統を継承したとみられる佐藤佐太郎氏の歌を抽いてみる。

橋本 徳寿氏(北海道詠より)

- 1 行けど行けど茂り黄に咲き限りなしタンポポは何かにならぬのか
- 2 ここより海に没る日が見ゆという海に待ちつつ昏れてしまう
- 3 「ここは俺のだ」版図と鳥を掠取する武力の前によろうなき民

佐藤佐太郎氏

- 4 台風のあらびしなごり流木は海にただよい清き砂浜
- 5 香ぐわしき原を横ぎる路あれば秋の西日をうけつつ歩む
- 6 山高き道のつづきに林見ゆ直線に立つ木のすがしさよ

渡辺 義隆先生

- 7 あくまでも色鮮烈に花は咲き流民さながらに漁家まばらなり
- 8 生きものの吐きし空気はここになし荒磯の上にひくき熊笹
- 9 樺太を返せ千島を返せオホーツクの宗谷の海に溟滓れるこえ
- 10 喧噪の耳に聞くべき声ならず憂愁の湖のもらす一語を
- 11 鉦のごと光ふふみておちたるは石狩川のみなもとの水
- 12 夕冷えのもみじに早もともす窓唄に灯色のほのと流るる

こう比較してみると質の相違がはっきりしてくる。橋本氏、佐藤氏の歌は素材が消化されぬままの羅列だったり、とらえ方が平板で見ただけの場面の説明的写生である。これなら敢えて歌にせねばならぬ詩情が感じられない。然るに先生の歌は



写生詠でありながら、詩人としての詠嘆が深く深くこめられている。⑫を除く五首は「北海道」の作だが、その体臭が、作者の五感の働きを通して確実に匂ってくる。作者の純粹客観が実は主観と渾然としているのである。

ところが歌集必ずしもこのような歌ばかりではない。沈潜されたものは非常によいが、作者の意識が過剰だったり、先行したものは沈潜が聞かないため意識や主情の暴露に終ったり、第三者の窺知を許さぬ勝手な感動内容になったりしている、たとえば

- 13 ここに在るものを見よ思惟せむとする心あり  
太古のなかの闇のうばたま
- 14 いちぢくの熟れ色みゆる直江津のはたごに昏  
迷ふかき溜息
- 15 神の意遂げむと希う人間の立つは嗟嘆と懊惱  
の淵
- 16 焼けただれ燃えつくしたる毒の花情炎の地の  
赤き火山土
- 17 還らざる怨み抱きて立つ岩の峭ちつつは海に  
没せん

⑬のここにあるものを見よとは何のことであろうか、それ以下が観念の世界を一步も出ぬために作者の対象とした世界が具体的に掴めない。⑭第五句昏迷ふかき溜息のよってくる必然性が上句より全然引出されてこない。⑮神の意はどういう心であろうか、作者だけのものである。しかもそれ以下がやはり観念的に処理されているため作者の感動の迫真性が薄くなっている。⑯阿蘇と題があるので熔岩か火口か、あるいはそれを含めた全体かも知れぬ。いずれにせよこれは作者の心の内面の比喩でなく視覚から得たものであろうが、それにしては毒の花とか情炎の血と言った言葉が言葉だけに終わった感がある。⑰還らざる怨みも作者だけの意識であり、先行しすぎている、僅かに抽いてみたが、このような歌がちらちらと目につく。

写生詠でも作者という人間性を通すとき、通し方いかんによっては第三者に通じない歌となる恐れが多分に生ずる。これはひとり作者のみのことでなく、私やたくさんの歌人が陥りやすい共通的な通弊といえよう。

「人間一生のうちに何句残さん人は云々」と芭蕉が言ったとか。その通りでさらに傑作が生まれるものではない。私も歌集「焰の中の美学」を編んだとき、途中で幾度か自分の歌にいや気さして投げ出ししかかったことがある。つまりよい歌がないということである。

ところが、この歌集にはさすがに燦然と不滅の光芒を放っている秀作がある。

- 月かげは一枚橋を浮かせども渡りは行かず対  
岸の梅
- 斯くありて人は孤高に赴きぬべし月に濡れつ  
つ梅光るなり
- 潺湲の水ゆく雨後の径暗く随所に主となりひ  
とり心は
- み仏もこごえて眠る奈良の夜の互てたる月に  
白し山茶花

これらの歌は躊躇なく写生詠の最高峰として推すことができる。作者の高朗透徹な詩精神が極限まで高められたと申しても過言ではあるまい。人間の営みの道おろそかならず、孜々として到り得た高さ、写生ここに極まるの嗟嘆すら洩らさせるのである。

ところで、ここで一つの問題を提起したい。それは作者の作歌基盤となっている「空」の哲学観のことである。

この内容については全然ふれてないので作品を通じて推測するより外ないが、かつて創造主義論なるものを発表されたとき人間の行き方の根本理念として深い共鳴を覚えたことがある。ところが現在の「空の哲学観」とはいかなる関連になるだろうか判然としない。短歌は昔の歌からみてる

と一つの関連をもって変化しているプロセスがよくわかる。だがこの理論においては、私が推測した「空」と「創造主義」が直接に結びつく関連性が作品を通して受け取れぬのである。「空」とは一体なんであろうか、作者はまた「超越」ということも言っている。するとこれは色則是空的な考え方ではなからうか。「この世の中のことは煎じつめれば所詮すべては空である。むなしい事のみである。このむなしさを認識した上に立って一切を超越した高次元の世界に心処を求めるべきである。」との考え方のように思われる。もしそうなれば現実的には隠棲とか、逃避とか、孤高とか言ったことになって来はしないか。歌集に収録された歌もそういう意味からみて超俗的な風景詠が圧倒的に多い。だが創造主義理論の中には、短歌の文学性の外に哲学性、宗教性、社会性、歴史性と言った面も強調されていたはずである。であるにもかかわらずこの歌集からは社会性とか歴史性を汲みとるにはあまりにも稀薄である。むしろ前述の超俗的立場がつかぬかたれている。この間の経緯はいかに説明されうのだろうか。

短歌も時代という背景を背負っている。時代の流れによって短歌も徐々に変貌してゆくのである。万葉の名歌、古今・新古今の名歌あるいは明治、大正の名歌といえどもその時代において一つの役割を果たしたとしても現時点においてそれがそのまま通用しない。歴史的な意味と価値はあっても現時点の最高水準の短歌とはいえない。いわば骨董品の価値である。

明治時代と大正時代と昭和時代とは短歌の質も論も変わっている。それは社会は緩慢ながら変革を絶えずつづけているからである。この変革によってその時々時代性というものによって短歌のみならずあらゆるものが変化し発展してゆく、短歌もその一つとして一個所にとどまっておれないものなのである。

特に戦後の短歌は急速な転回をみせた。その所産として哲学性、社会性、歴史性と言った面が重視された短歌の台頭をもたらした。めまぐるしい質の転換が行なわれる。私たちはこの流れに無批判に追随するだけが能ではない。かと言ってこうした時代の動きを無視して独り超然とあることは自からを押し流すだけにだけになってしまう。先生のとられた道は実に険しかった。そして前人未到の領域に一步を印されたといえよう。

だが、すでに先生の社会性や歴史性の無視あるいは時代の変遷ということよりの超越そのものがすでに自からを押し流してはいないか、一級の名品は名品であっても骨董品になってはいないか、即断をはばかるが、私のひそかなる危惧である。それほど現代短歌は変貌しており、社会性や哲学性を無視しては発展しえぬ段階に来ている。その意味において先生の傘下からどのような作風の歌人が生れるかという問題を内包した短歌追求のあり方をこの歌集が提起している。そしてそれはまた薫風社の問題であり、歌壇の各結社の問題であると言えよう。(39・10) (「私はかく鑑賞する」71-74頁)

上掲は事件よりほぼ9年後の叙述であり、三恭の心も徐々に沈静化されつつあったことが窺い知れる。彼は、よしたかの写生詠を「現歌壇の誰よりも純粹に写生を追求された感が深い」として、佐藤佐太郎等との実証的な比較論評を行ない、「写生詠の最高峰」とさえ讃える。しかし、三恭の歌観に反する「社会性や歴史性の無視」というところは厳格に論難し、「一級の名品は名品であっても骨董品になってはいないか」とさえ決め付ける。

ただ、三恭が『薫風』創刊当時に発した過激な言辭は消え去っている。そのあたりを、次章で述べておきたい。

## 2. よしたかと三恭の交流

三恭がよしたかの門に入ったのは、1931年（昭和6）、19歳のときのことであった（例えば、平井恭治<sup>③</sup>編「平井三恭年譜」〔平井三恭追悼号〕所収）参照）。

### (1) よしたか、応召中の三恭を慮る

よしたかが、当時応召された三恭を慮った文章が残されている。当時、三恭は南城英雄と号していたので、よしたかは「南城英樹君目下山西を舞台とし、更生の意気猛然と奮闘中なり、同人一同更生若者の前途を見守り愛護祝福の祈りを送りたい、現在新京市東道間街大同仏教総会にあり」と書いている（『編集後記』『あぢさゐ』第12巻6・7月合併号）。

三恭の前掲「年譜」によれば、1938年（昭和13）の項に「六月 満州大同仏教総会教育主事兼日語学院主事」とある。

### (2) よしたか、三恭を詠う

戦後、よしたかが三恭を「歓会」と題して、詠ったものがある（『あぢさゐ』第26巻7月号）。

われと英樹酒に亢奮しそむるに分別くさき顔  
の鈴雄よ  
計画的な生活設計着実につましき君が日々のけ  
なげさ  
妹君の結婚祝意の象徴歌なんのぶざまぞ勉強  
をせよ  
課長殿やや老成のきらひあり安んず勿れ小成  
の器に  
われに真似がたきすぐれしところさもあらば  
あれ暴君ぶりが未だ見ゆるぞ  
しつけよき子らいぢらしも喜ばせやるべきこ  
とが何かあらぬか  
上のふたりおとなしけれど三男めこいつなか

なか手に負へぬぞよ

歌の中の「鈴雄」は、三恭とほぼ同期の宮竹鈴雄のことである。「計画的な生活設計者」、「課長殿」とは、三恭が1947年（昭和22）1月に職安行政に入職し、伊丹・尼崎・神戸の公共職業安定所課長となったことをさす（例えば、「職歴」『生きていてこそ』所収、参照）。「暴君ぶり」は智恵子夫人に対してのものであるが、『生きていてこそ』は智恵子との結婚35周年を記念した合同歌集であった。そして、よしたかが三恭の子どもたちのことを良く知っていたのは、歌会行脚の道すがら三恭の家には何度も宿泊しているのである。

上記のことからも、よしたかと三恭は師と弟子の関係ながら、肝胆相照らす仲であることが微笑ましく読み取れる。

### (3) よしたか、三恭を論評す

上述の如く、よしたかの三恭に対する愛情は、非常に色濃いものであった。1952年（昭和27）、よしたかは「あぢさゐ作家論」と題した連載を創めるが、その嚆矢に三恭を取り上げたのである。

その冒頭には、三恭は「入会間もなく、瓜生英彦の作品の透徹俊英なのに傾倒して、それにあやかると気持から、南城英樹とその英の字を採って以て号したことほど左様に当時英彦は俊秀卓抜な作品を発表したものであったが、その憧憬された当の英彦近来さっぱり埒もなき沈滞ぶりである」とある。ここからは、南条英樹の号の謂われ、三恭と瓜生英彦の関係が読み取れる。

次に、三恭の性格として「彼は平井家の長男として生れたためか、頗る両親の鍾愛を受けたせいでもあらうか、どちらかと言へば俗に言ふ我ままであり、激情的であって、意志力が弱かったが今日では永年の生活の苦闘によって、非常に感情的にも強いがすべての行動に意志的な強靱さを練え上げて来たようである」と述べられている。この

鍛え上げられた性格が、よしたかとの訣別の原動力になった、と筆者は考える。

また、『あぢさゐ』復刊に関ることどもとして、よしたかは「引揚後私は直ちにあぢさゐ復刊のことを計画したのであったが、とりあへず謄写で二回会報として出した際、同君はこれらの煩瑣なことを一切やってくれたのであった。その後二回本印刷にして出したが、旧会員何れも何らの熱意と反響を示さず、一昨年五月いよいよ軌道にのって復刊をつづけるに至るまでの同君のかくれたる熱意をここに改めて感謝を表しておきたいのである」とある。ここからは、『あぢさゐ』復刊の具体的な道筋を知ることができると同時に、三恭がよしたかとの訣別を「初めから全然そんな意志は無かった」と述懐する信憑性を筆者は疑わない。

その後、三恭の歌の鑑賞と彼の歩む歌作の展望が示されるが、本稿では割愛する（『あぢさゐ』第27巻4月号）。

#### (4) 三恭、あぢさゐ会への貢献

標記について前節でも述べたが、ここでは『あぢさゐ』復刊後、1952年における三恭の目覚ましい貢献ぶりを紹介したい。

例をあげると、よしたかは「阪神支部を負って立つ平井君の勉強精進ぶりと、歌論およびその理念と信念の徹底、さらに支部によする努力と熱意には全く頭が下る」と語る（「時雨山房雑記」『あぢさゐ』第27巻9月号）。

また、「阪神支部では十一月から支部会報一号を出した。範囲の広い同支部では適切な処置であ



あぢさゐ創刊三十周年祝賀全国大会  
(1955年<昭和30>9月24日、於群馬県甘楽郡・一の宮公民館)  
前より二列目、右より五人目が渡辺よしたか、その右隣りに平井三恭がいる。

る。平井氏は支部運営上連絡通信のため電報電話郵送料等多大の犠牲を払って来てるのであるが同支部会員は関せず焉ではいけないと思ふ」とも記す（「後記」『あぢさゐ』第27巻12月号）。

まさに獅子奮迅の活動であった。

#### (5) 三恭、叛乱さる

三恭には「叛乱事件4首」という歌がある。これも当初は『薫風』に掲載されたものであろう。ここでは『割青俎』から転載する（8-9頁）。

抑えんとすれどもわななきとまらざり霹靂のごと連名脱会  
吾子のごとく育てきたるが首謀とう心も身をも焼きつくさる  
ぎらぎらと目のみ燃えいん幾夜さを背信の貌見すえたるまま  
名声のためには師をもほうむらん心育てしと思わざりしが

後年、三恭はこの歌の状況を文字にしている。「私は結社のあり方に、短歌の純粹性を人間の純粹性にまで及ぼそうと試みた」としたが、「現実には実に惨たんたる敗北を喫したのである。それは四回に及ぶ主要同人の脱会事件である。主要同人といっても一、二名を除く殆んど全部は私が短歌の初心から指導して育てあげた者ばかりである。従って絶大の愛情と万福の信頼をかけており、私の手で一日も早く歌壇に送り出してやりたいと念願して、惜しみなく努力を払っていたものばかりである」と語る。その「真因」としては、四回のうち一回は誤解にもとづくものと和解したようであるが、「三回で通じて言える事は脱会の主な目的は既に関西では一応歌人の仲間にならぬ様になった、之以上は薫風社に所属するのは不利である。一流誌に属するなりフリーの立場の方が有利と判断したものであると思われる」と分析している（『焔の中の美学』あとがき」290-291頁）。

三恭がよしたかと訣別したことと、三恭が弟子たちに叛乱された事由とは、当然その意味が違う。しかし、かつて三恭がよしたかと訣別し、よしたかがどのような思いをいだいたか、人間としてのその悲しみを知ることはできたのである。

#### (6) 三恭、よしたかの逝去を悼む

よしたかの逝去に際しては、三恭は追悼歌を贈っている（『あぢさゐ』第58巻2・3月合併号）。

巨き星上野の地に殞ちしとふ夜もすがらなる  
木枯の音  
八十五を天寿というも坐すことの大ききしみ  
じみ悔呼び戻す  
かの刻が終の別れか枯れそめし紫苑をみつめ  
罷りきにしが  
時長く人は秒たる生きれなどいのちは消し得ぬ  
煌きをもつ

三恭はよしたかを「巨き星」と表し、「坐すことの大きき」をしみじみと述懐しつつ「悔」を感じているのである。中島しぐれ氏は、父の葬儀のときの三恭の弔電を今も覚えているという。それは上掲の第1首であった。

三恭の歌に続き、次子の歌が掲載されている。

執着を捨て去り逝きし夫にして硬直なきまま  
永遠の旅だち  
乏しに長寿さくらの咲き初めど賞でにし夫  
なく黄泉路遙けし  
桜草窓辺にあまた吊り下げど悲嘆つのでりて月  
忌迎ふる  
今日月忌水雨降り振る人間の醜さ洗へとふみ  
心ならん  
何よりも好みしお茶を供へつつ今日月忌なり  
涙あふるる  
つづまりは己一人の道にして月皓皓と夫みそ  
なはず  
師走日に大待宵の狂ひ咲く黄の花共に眺めた

りしを  
 狂ひ咲く大待宵は如月の風にふるへど夫はい  
 まさず  
 人前で涙見せねば情強<sup>こは</sup>き妻と見るらん一人哭  
 きつつ

台湾時代より、よしたかとともに歩んできた次子は、長女あやめの死、三恭との訣別、等々のことどもを目の当たりにしてきた、その夫・よしたかを思う歌である。

### おわりに

本稿はよしたかと三恭の訣別について、三恭の自ら語る資料を使用して、その経緯と経過を探索してきた。当初、三恭もいきり立っていたが、歌集『焰の中の美学』（1963年〈昭和38〉）の発行時には、客観的に状況を理解することができるようになったと思われる。本歌集の奥書には、

誠に古風な言い方ながら

慈愛深かりし亡き父三郎彦  
 今尚熊本にいて見守り給う  
 母喜久並びに短歌に終世を  
 かける  
 決意を頂いた渡辺義孝師に  
 この一本を捧げる

とある。

このような一文を、三恭が草することができるようになった背景には、まず三恭にとってよしたかは正真正銘の「師」であったこと、『あぢさゐ』に命を賭したよしたかの姿を直視し続けてきたこと、——であればこそよしたかと袂を別たしたのである。そして、薫風社を立ち上げたものの弟子たちの裏切りにあったこと、それも一度ならず三度までも——このような過程を経て、三恭はよした

かの許に帰ってきたのである。

### 註

(1) 本書の「後記」には「神戸市中央病院 十一階 三〇三号室 昭和五十九年五月一五日」と記されている。その八日後、5月23日に逝去した。

(2) よしたかにとって、英彦は大切な弟子であった。よしたかは、台湾時代の「瓜生英彦は塩水港製糖会社の寿、大和両工場で支部を設け、これを指導した。この間彼は『赤彦鑑賞』の続編をものして力強い業績を残した」と記している（「回顧三十年」）。また、戦時中の「英彦に逢ひ まさるに逢ふ」と題した歌にも、その思いを垣間見ることができる（本編（中）- 2, 74頁）。

戦後、よしたかは「つねすけ英彦東京に健在なり」と題して、英彦を3首詠う。

東京のつゆ空昏したづね当てし工場に英彦の  
 顔がありたり  
 君が事業何とかなれよ試運転のベルトの動揺  
 二階ゆさぶる  
 食はず着ず事業見きはめつかねども茂吉全集  
 買ふ意力あり

このように、よしたかは弟子を探し当てるのである。その弟子を思う心をいかに考えるか。

(3) 平井恭治は三恭の三男である（「年譜」『薫風—平井三恭追悼号—』所収）。

(4) これらの歌に続けて、次子は「あぢさゐ二、三月作品」欄の最末尾に14首をあげている。

亡き夫が五十七年かかけ来し理想碎かる葬儀  
 の夜に  
 今更に夫の偉大さ身に沁みぬ葬儀の夜の歌友  
 の叛乱  
 面識のなければ従けぬとふ北国の歌友あまた  
 とか吾の不徳に  
 あぢさゐは守り行かめと面識のなき北国の歌  
 友の温情  
 私だけ悪者になればそれでよし誠実と平等掲  
 げ生き来し  
 づたづたに切りさいなまる思ひなり人間哀し  
 人間無残  
 あぢさゐは私が継ぐとふ表明を支持し呉れし  
 は唯二人にて  
 夫々の心底見えたりかくなるも吾の不徳と筆

は折らなん  
少数の圧力はさず筆を折る吾の弱さを許し  
給へな  
廃刊とふ事に至れば夫々に喪ひしもの重さ  
沁むならん  
廃刊を怒り悲嘆しほくそゑむ歌友さまさまに  
波紋乱れん  
哭きつつにあとがき書きぬ廃刊とふ事に至り  
しは吾の不徳に  
貧しくも心豊かに生きゆかん萩の枯枝風にも  
まるる  
廃刊に至りし経過みそなはず夫の胸中思へば  
哀し

中島しぐれ氏は、筆者に『あぢさゐ』廃刊の経緯を語ったことがあるが、その経緯と経過は上記の歌の通りであった。

最後に12首目の「あとがき」について触れておきたい。まず、「社告」に

主宰者亡きあと、今後の「あぢさゐ」をどうするかという提議が、葬儀のあとの懇親会で出され、その席上にて、今迄実質的にあぢさゐ誌の編集を担って来た、渡辺次子が続ける旨を表明致しましたものの、思うところありて、親族一同、合議の上「あぢさゐ」は第五十八巻三百八十八号、渡辺よしたか追悼号をもって廃刊致すことになりましたので、ここにお知らせ申し上げます。

とあり、「あとがき」には、

社告しましたように、この号を以って大正十五年九月に亡き主宰渡辺よしたかが、台湾の花蓮港に於て創刊したあぢさゐを廃刊します。一月九日葬儀のあとの信州屋に於ける夜の懇親会上で、渡辺次子が今後「あぢさゐ」を続けて行くと強く表明致しましたのに、廃刊という事態に至りました事、その場に列席されました、お一人お一人に私の不信を深く深くお詫び申し上げます。これも一重に私の不徳と致すところでございます。お許しくださいます。全国の多勢の会員の方々から、ぜひあぢさゐの灯を消さないで続けて下さいとのお励ましのお言葉を頂きました。その方々の御支援御温情をも裏切る事となり、誠に申しわけなく断腸の思いです。しかし廃刊を決意するに至った私の苦衷をおくみとり下さいまして、私のわがままと弱さと不徳をお許し下さいませ。

とある。「社告」と「あとがき」、ともに一部のみの引用であるが、次子の深い苦衷を読み取ることは容易である。

#### 【付記】

平井三恭について、あぢさゐ会の中島しぐれ氏は「ひらい・さんきょう」と呼び、筆者もまたそのように呼称している。

このたび三恭の歌集のうち、『水の心』（兵庫県立図書館所蔵）の奥付けには、鉛筆で「ひらい・みつやす」とルビがふってあった。一般的に「恭」の訓読みはなかなか難しく、それで「さんきょう」と呼び慣わしているのもあって、「やす」と訓じる可能性があることを、ここに指摘しておきたい。

Mitsuyasu Hirai's breakaway from Yoshitaka Watanabe  
*Tanka* Poet Yoshitaka Watanabe : His life and literary works (Part 6)

Shuichi NOGUCHI

**【key words】**

Taiwan, WATANABE Yoshitaka, HIRAI Mitsuyasu, *Ajisai*, *Kumpu*